

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：31311

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381037

研究課題名(和文) フランス第三共和制「後期」における制度・モラルライク・エピステモロジー問題

研究課題名(英文) The Influence of Secular Moral Education and Epistemology on the Educational Institutions of the Latter Period of the French Third Republic

研究代表者

太田 健児(Ota, Kenji)

尚絅学院大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：00331281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：フランス第三共和制後期の教育制度の変遷は、第二次世界大戦後の教育改革まで、国民皆教育、教育の機会均等の実現など、右肩上がりの歴史的観によって説明されてきた。これ自体は正しいが、その間、政教分離の原則は紆余曲折しており、カトリックによる宗教教育とモラルサイエンスとの対立は継続していた。初等教育への宗教教育の復活の動きもあり、今日の日本の「教育勅語」復権問題に似た道德教育論争があった。しかし、自然科学と宗教とは棲み分けしており、科学性や実証性が対立点ではなく、文系・理系ともそれらを共通の学問原理としていた。故に論点は別であり、エピステモロジーの詳細、一般教養観の解明が急務である点が確認された。

研究成果の概要(英文)： This paper is a detailed assessment of issues related to the link between secular moral education and epistemology and the resultant effects of this linkage on educational institutions in the latter days of the French Third Republic. In this period due to the rise of secular moral education many changes took place in educational institutions; for example, the previously adopted phrase 《Duty for God》 was deleted from the Textbook. Because of such changes, if one is effectively to elucidate the details of this history of education, it is essential that one also take a serious look at the political history of France during this period. To a significant degree, French thought in general has focused largely on epistemological concerns; indeed, this philosophical bias is even palpable in cultural science and natural science. Further research will deal with a synthesis of philosophical history, sociological history, educational history, and political history.

研究分野：フランス教育学理論 フランス教育思想史 フランス社会思想史

キーワード：エピステモロジー 統一学校運動 ジャン・ゼイ ライシテ 道德教育論 デュルケーム フランス第三共和制後期

1. 研究開始当初の背景

(1) 第三共和制「後期」(以後「後期」のみで表記)は、政治色の強いモノトーン的な教育史像になってしまっている。「統一学校運動」と当時の文科相ジャン・ゼイによる着手、ドイツ軍占領によるヴィシー政権樹立(1940年)による頓挫、第二次世界大戦後1947年「ランジュヴァン=ワロン改革案」提出による成就、という大筋で要約され、「統一学校運動」の詳細、ジャン・ゼイ改革の内容とその賛否、この路線での「ランジュヴァン=ワロン改革」への結実などで「後期」の教育史全てが語られていた。その分モラルライクの紆余曲折を含めた定着過程、非聖職者限定の教員養成制度の詳細、科学教育と人文教育との対立問題の推移やその詳細などが不明に付されていた。

(2) 「後期」においてもモラルライクの制度化が紆余曲折を経ている点であるが、1923年2月23日には初等教育の教育課程から「神に対する義務」が削除されており、このこと自体紆余曲折の証拠である。さらには同年の6月20日に程なく義務教育において「神に対する義務」の項目が復活するといった混乱が生じている。またヴィシー政権中、初等教育への「神に対する義務」復活、聖職者による教育活動の復活、「教理問答」の復活などモラルライクに反対する復古的な教育政策が行われていた。

(3) 「後期」におけるモラルライクの理論問題の展開が全く不明である。例えば、デュルケームの『道徳教育論』は実際1902-1903にかけてのパリ大学での講義であって、著作として刊行されたのは彼の死後1925年のことである。『教育学雑誌』でもデュルケームは存命中(1858-1917)、教育学者ではなく「社会学者」としてのみ紹介されている。そうすると、ライシテ開始の1881年から1925年まで約40数年間、他の道徳教育論が輩出してはいたはずである。

第三共和制「前期・中期」までは本研究によってその詳細が判明しているが、第一次世界大戦後からデュルケームの『道徳教育論』を含めてどのようなモラルライク理論が輩出したのか？学校教育現場にどう定着していったのかが不明なのである。

(4) デュルケーム後のモラルライク理論とその実践とは、その推進者フェルディナン・ビュイッソン(1841-1932)に託されるが、ビュイッソン以外、モラルライクとの関連があった思想家、政治家あるいは政党、社会運動などが素通りされている。例えば、レオン・ブルジョワ(1851-1925)、セレストアン・ブーグレ(1870-1940)、急進党などへの言及が乏しい。この時代は戦乱期へと突入していくわけだが、この当時の社会主義、社会運動、労働運動、市民運動などと教育問題との関連が丁寧に論じられていない。

(5) エピステモロジー問題とモラルライクとの関連、その後の教育制度や教育改革とエピステモロジーとの関連を主題とした研究が皆無である。デュルケームの教育学の三部作『道徳教育論』『フランス教育思想史』『教育学と社会学』では、モラルライクの帰結として、科学的認識論(エピステモロジー)に基づく自然科学教育、歴史教育の意義が説かれ、脱宗教による道徳性の発達は可能であると結論づけられている。そしてデュルケーム自身の指摘にあるように自然科学と人文科学のカリキュラム上での対立に関する論争はデュルケームの時代まで75回あったという。では第一次世界大戦後から科学教育がモラルライクとの理論的整合性が確保されたまま学校教育で市民権を得てきたのか？全く無関係に科学教育が普及して今日に至ったのか？その微妙な絡み合いが全く不明である。1935年にはフレネ学校も開設され、フランス型新教育運動も盛んになってきていたが、新教育運動とエピステモロジーとの関連への言及

した研究もない。

(6) エピステモロジー問題と第三共和制「後期」思想史分野との連動の可能性が高いが、この点への指摘はあるが本格的な研究はない。この時代、思想史分野では、特にG.バシュラール(1884-1962)、若き日のG.カンギレム(1904-1995)が登場してくる。故金森修氏(東大大学院授)の研究で哲学史・思想史領域でのエピステモロジーの全貌は明らかになっている。また教育界へのバシュラールの影響は石堂常世氏(早大名誉教授)が指摘している。1947年「ランジュヴァン＝ワロン改革案」以降、フランスでは科学教育がさらに進展していくわけだが、科学者のランジュヴァン自身、心理学者ワロン自身がエピステモロジーに無関係・無関心だったはずがない。この点が明らかになれば、教育学分野と思想史分野とのクロス・トーク(cross talk = 交流・発展)が明らかになってくる。

以上(1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(6)から、「後期」はモノトーン的な教育史像には収まり切れない多くの錯綜とした教育問題、社会問題が存在し、それらを解明した上での「後期」教育史像の再構成が急務とされていたのである。

2. 研究の目的

(1)本研究は、フランス第三共和制「後期」(1919年～1940年)における教育制度・モラルライク・エピステモロジーの相関関係を解明し、フランス教育史を抜本的に書き換えることを目的とする。

(2)第三共和制「前期・中期」(1870～第一次世界大戦まで)は政教分離問題、所謂「ライシテ」をめぐる道德教育論争とその産物たる「モラルライク」(=世俗的道德教育論)とその理論を担ったデュルケームのモラルサイエンス(エピステモロジーが論拠)

とによって特徴づけられる。しかしこれらがその後学校教育現場にどう制度化され、どのような教育論争があり、どのような教育学者・政治家・思想家がそこに絡んでいたのか等その詳細に関する先行研究は少なく、これらの点を補い、新たな第三共和制「後期」の教育史の再構成を具体的な目的としている。

以上(1)、(2)を研究目的とした。

3. 研究の方法

(1) 第一次資料に直接当たることを最重要とした。具体的には、フランス第三共和制「後期」の各種道德教育論、教科書・教師用指導書、各教育学者・思想家・政治家などの諸言説、教育学分野の学術雑誌類、官報(政命、省令、通達)を収集・精査を行った。モラルライクに関しては、それに関する論争の有無、論争があれば論点を抽出・整理、エピステモロジーとの関連言説も同様に処理、各教育制度・カリキュラムの制度改変の存否とその背景を解明、社会思想史側からの教育史研究の探索、以上四方面からの研究を試みた。

(2) 教育学系学術雑誌の閲覧と解読、教育制度・教育政策に関する研究書の収集と解読も行った。一口に教育学系の学術雑誌といっても様々なものがあり、それぞれの特徴や位置関係や優劣を把握するための研究書自体も入手し、当時の教育事情の立体的な再構成を試みた。

以上(1)、(2)の研究方法・手法を採用した。

4. 研究成果

(1)「後期」のモラルライクの紆余曲折について、1923年2月23日には初等教育の教育課程からの「神に対する義務」の削除、同年の6月20日には「神に対する義務」

の復活、「後期」以後もヴィシー政権での初等教育への「神に対する義務」の復活、聖職者による教育活動の復活、「教理問答」の復活などの混乱の原因は、純粋な教育学上の理論的帰結ではなく、政治の産物であった。それゆえ、モラルライク、これに関連する教育制度の問題は、学問的なレベルではなく、さりとて無関係でも無い所謂「一般レベル」(=「巷レベル」)での「モラルライク観」に基づく問題として捉えた方がよく、むしろこのレベルを過不足なく把握しておく必要がある。同時に西洋史学分野の20世紀フランス史研究(第二次世界大戦終了まで)の本格的導入によってより多くが解明される点も確認された。

(2) 教育の具体的中身のさらなる解明が必要である。教育内容・カリキュラム・使用教科書等、教員の専門性育成、採用の実態、人口、初等教育・中等教育の学校数、生徒数、教員数、教育内容・方法、国家予算の推移等々の実態が不明のまま、代表的な「教育政策名」を列挙するだけでは「後期」の教育史像の再構成は不可能である点を確認された。これは上記(1)のモラルライクの紆余曲折や定着過程、非聖職者に限定した教員養成制度の詳細の解明に直結する。

(3) エピステモロジー問題に関しては、今回の研究での最大の収穫があった。エピステモロジーは、フランス教育史に通底する学問原理で、その後の教育改革の土台となっていた点である。上述のように哲学史・思想史分野では完成された研究が存在するわけだが、そこでの「科学性」という概念そのものは、他分野の学問群でも共有されており、分野横断的に普く存在していたのである。喫緊の課題は社会学史における「科学性」の扱いと思想史分野のエピステモロジーとの関連性の解明であるが、実は教育学分野とも直結している問題でもあった。すでに科学教育と人文教育とは棲み分けが

成立し、学問原理を共有していたのである。科学教育と人文教育とは、今日的な意味での対立関係にはなかった。例えば、この問題はデュルケームの時代まで既に75回の改革があったことは前述の通りだが、しかし、これは古典、ラテン語の修辞・文法など、今日の日本でいえば、古文・漢文の時間が殆どで、理数系科目がカリキュラム上見当たらないような状態を指しており、今日的な人文教育への批判があったわけでない。それゆえ、狭義のエピステモロジーではなく、広義のエピステモロジーの系譜学が必須であり、この解明を待って、各分野の学説史を再構成する必要が出てきた。

(4) 第三共和制「前期」「中期」において、「モラルライク」は二つの系譜、つまりデュルケームによる「モラルサイエンス」の立場と、自己修養論的な「スピリチュアリズム」の立場を生んだことは本研究(前回の科研費)で解明されている。これは上記(3)の「科学教育と人文教育との棲み分け」に直結している。確かに前者は「エピステモロジー」が土台である。しかし、この時代、デュルケームのような実証主義社会学以外の人文系学者たちも、社会思想的な言説を展開する際、一様に自らを社会学者(sociologue)と名乗っており、その手法を実証的(positif)であるとしていた。A.コント(1789-1857)以来、どの学問分野でも生理学をモデルにした「エピステモロジー」的原理を採用していた。

(5) モラルライク問題は、「後期」から「第二次世界大戦期間」(=ヴィシー政権)までも視野に入れ、ネーション問題、ナショナリズム、愛国心教育、フランスの国作りという側面から、再度分析する必要がある。他方、人権問題、人種差別問題などの側面からも分析される必要がある。その際の注意点は、右肩上がりの民主化実現史観、史的唯物論には収斂し切れない細かい問題群

を丁寧に一つ一つ拾い上げて、ニュートラルな立場から分析していくことである。

(6) 副産物的発見として、人文教育にとっての最大の敵は「理系教育」ではなく、「一般教養概念」であることが判明した。人文教育にとって最大の恐怖は、「一般教養」と同一視され、その「科目専門性」が認知されず、カリキュラム上の一般教育科目とされるか、カリキュラムから排除されることである。上述のように、科学教育も人文教育も根底では共通の学問原理(エピステモロジー)を有していたが、人文系科目の「科目専門性」と「一般教養概念」との異同は明確にはなっていなかった。これには、心理学者ワロンなどを初めとする学者達による「一般教養概念」言説を抽出する作業が必要となってくる。これを経て、当該問題の全貌が把握できてくるはずである。

以上(1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(6)に示す研究成果を得ることができたが、同時にまた新たな研究課題も判明した。これらの新たな課題解明を経て初めて第三共和制期の教育史の完全な再構成が可能となるであろう。

本文が依拠する文献類(一部) [*文中の註番号は割愛してある。]

- 1)太田健児「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相 -デュルケーム中期道德教育論 :『フランス教育思想史』-」『尚絅学院大学紀要第 66 号』,2013 年,49-60 頁.
- 2)太田健児『研究報告書:基盤研究(C)平成 23 年度~25 年度、課題名:「フランス第三共和制期の政教分離(ライシテ)とモラルサイエンス問題」研究代表者:太田健児.』2014,全 110 頁.
- 3)金森修(編著)『エピステモロジーの現在』慶應義塾大学出版会 2008 年,全 500

頁.

- 4)金森修『フランス科学認識論の系譜 カンギレム,ダゴニエ,フーコー』勁草書房,1994 年,全 329 頁.
- 5)金森修『自然主義の臨界』勁草書房,2004 年,全 293 頁.
- 6)金森修『負の生命論 認識という名の罪』勁草書房,2003 年,全 232 頁.
- 7)金森修『サイエンス・ウォーズ』東京大学出版会,2000 年,全 490 頁.

Cf)金森修の訳書

F.ダゴニエ(著)『具象空間の認識論 反・解釈学』法政大学出版局,1987 年,全 295 頁.

F.ダゴニエ(著)『面・表面・界面 一般表層論』法政大学出版局,1990 年,全 323 頁.

G.カンギレム(著)『科学史・科学哲学研究』法政大学出版局,1991 年,全 680 頁.

- 8) Marcel Ruby, *La vie et l'oeuvre de Jean Zay*, Beresniak, 1969, 509p.

また統一学校などの教育史は次の文献を参照.

- 9)太田敬『統一学校運動の研究』大空社,1992 年,167-233 頁.
- 10) Antoine Prost *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967*, Armand Colin, 524p.
- 11) F. Ponteil, *Histoire de l'enseignement 1789-1965*, SIREY, 454p.
- 12)石堂常世『フランス公教育論と市民育成の原理 - コンドルセの公教育論を起点として - 』風間書房, 2013 年, 全 558 頁.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

太田健児、フランス思想史の中のデュルケーム - 神なき時代のモラルサイエンスと社会学 - 、社会学論叢、日本大学社会学会、

2017年、23-36

太田健児、フランス第三共和制期世俗的
道徳教育論の諸相 - デュルケーム後期
道徳教育論 :『宗教生活の原初形態』その
2 -、尚絅学院大学紀要第70号、学内紀
要、2015年、51-63

太田健児、フランス第三共和制期世俗的
道徳教育論の諸相 - デュルケーム後期道
徳教育論 :『宗教生活の原初形態』 -、尚
絅学院大学紀要第67号、学内紀要、2014
年、93-106

〔学会発表〕(計2件)

太田健児、フランス思想史の中のデュル
ケーム - 神なき時代のモラルサイエンス
社会学 -、日本大学社会学会研究大会、
2016年7月23日(於;日本大学)

太田健児、社会学的方法の規準成立の“周
辺” ~ 社会思想から“社会学”へ 実証主
義の系譜の再編の試み - ~、デュルケーム/
デュルケーム学派研究会 第32回研究大会、
2016年4月16日(於;文京学院大学本郷キャン
パス)

6. 研究組織

(1)研究代表者

太田健児 (OTA, Kenji)

尚絅学院大学・総合人間科学部・教授

研究者番号: 00331281

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし